

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00637

研究課題名(和文)三線の製作課題解決に向けての生態音楽学的実践研究

研究課題名(英文)Practical Study of Ecomusicology for Solving Problems of the Sanshin Manufacturer

研究代表者

小西 潤子(KONISHI, JUNKO)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：70332690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,400,000円

研究成果の概要(和文)：沖縄県内の三線製作現場は、棹材の黒木の枯渇や製造技術伝承の危機という課題を抱える。本研究では、沖縄県三線製作事業協同組合や「くるちの杜100年プロジェクト in 読谷実行委員会」の取り組みを調査すると共に、和・洋楽器の製作・販売業者、楽器専門誌出版社、国内外の生態環境保全のプロジェクト先行事例等の情報収集をした。これらの資料や情報を国内外の研究者との共同研究によって分析考察し、国内外の学会等での口頭発表、レクチャー&コンサート、映像制作、論文等の執筆を通じて広く周知し、長期的かつ持続可能性を見据えての課題解決に向けて、生態音楽学的な実践研究の方法論を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ローカルな楽器製作者は、材料枯渇や低価格の海外産楽器普及に伴う製造技術伝承の危機に瀕している。さまざまな自然の素材で製作し、文化的な音表現を行う楽器は、生物多様性や文化の持続性に支えられているため、その存在自体が地球規模の環境問題のバロメーターでもある。本研究は、沖縄県内の三線製作を対象とし、従来の民族音楽学では扱ってこなかった音楽、文化、自然環境の複合的な問題を扱う生態音楽学(ecomusicology)という新しい学問領域における実践的な方法論を示したことに学術的意義がある。同時に、地域に密着した応用民族音楽学研究であり、地場産業の活性化と新たな価値づけという点で、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The Okinawan sanshin (a three-stringed lute) workshops and the craftsmen had faced the exhaustion of wood resources for the “tonewood” and crises of handing down expertise and skills of Sanshin-making to young people. This study surveyed events held by the Sanshin Craftsmen’s Business Cooperative Association of Okinawa and the 100-Year Kuruchi Forest Project in Yomitan and gathered information from makers and dealers of Japanese and Western musical instruments, a publishing company of the Japanese musical instruments, and the precedent domestic and overseas projects for protecting ecosystem and environments. Analyzing and examining the data in cooperation with Japanese and foreign scholars, the mythology of practical study of ecomusicology by paper presentation, lectures and concerts, the video, and articles were presented and published to the public.

研究分野：民族音楽学

キーワード：沖縄 三線 製作 生態音楽学 応用音楽学 民族音楽学

1. 研究開始当初の背景

反西洋中心主義から始まった民族音楽学は、グローバル社会に生きるマイノリティの音楽文化に耳を傾けてきた。ローカルで零細規模の楽器製作者が瀕する危機は、研究分野を脅かす。にもかかわらず、従来の民族音楽学ではこの問題を扱ってこなかった。それに対して、最近では文芸批判の分野での環境批判研究・エコクリティシズム Ecocriticism や文化的生態環境論 Cultural Ecology からの影響を受けた生態音楽学 Ecomusicology への期待が高まっている (Allen and Dawe 2016)。アレンは、生態音楽学を「音楽、文化、自然の複合的な研究。生態学と自然環境に関する音楽と音響のテキストおよびパフォーマンスの両方を考察する」と定義する (Allen 2012)。また、ティトンは「環境の危機に瀕する音楽、文化、音、自然に関する研究」だと述べている (Titon 2013)。

研究対象としての楽器が抱える課題を解決しなければ、今後の学問的発展は見込めない。民族音楽学では、音楽の現場に寄り添った応用民族音楽学研究 Applied Ethnomusicology の積み重ねがある (Titon 1992, Seeger 2006, Pettan 2008, Harrison 2012, Dirksen 2012, Pettan and Titon 2015)。音楽の現場と連携した応用民族音楽学としての生態音楽学的研究的実践への着手は、喫緊の課題だといえる。

2. 研究の目的

本研究は、生態音楽学的立場から、沖縄県三線製作事業協同組合(以下、三線組合)および「くるちの杜 100 年プロジェクト in 読谷実行委員会」(以下、くるちの杜プロジェクト)と連携し、三線の製作課題に取り組むものである。三線の材料枯渇や製造技術伝承の危機は、生態音楽学の関心事である音楽文化の持続可能性に直結する。生態音楽学は民族音楽学の手法を基礎としつつ、環境への関わりから社会的に従事する新たな学問的アプローチである。

三線組合は、2010年に立ち上がった同業者団体である。三線の普及、育成、品質をキーワードとして、海外情報発信、展示販売会、演奏体験、短期製作体験イベント「三線大学」、講話会、三線ナンバリング事業、「みんなの三線」製作販売、くるちの杜プロジェクト参加による黒木植林・造林事業に取り組んでいる。くるちの杜プロジェクトは、棹の原材料である黒木(くるち、和名:リュウキュウコクタン *Diospyros ferrea* Bakhuizen)の植樹運動を行う有志からなる。一般市民をはじめ、読谷村、読谷村商工会、読谷村観光協会、読谷村文化協会、琉球古典音楽野村流保存会、琉球古典音楽野村流伝統音楽協会、琉球古典音楽野村流音楽協議会、三線組合が参加団体である。黒木は、棹に使用するまでの生育期間に100年以上を要する。くるちの杜プロジェクトをローカルな一過性の文化活動に終わらせないために、黒木の長期的な生態環境保全とプロジェクト活動体制の持続可能性が必要である。

本研究では、民族音楽学の専門的な知識、フィールドワークや民族誌的記述手法による情報収集・提供、双方向的なコミュニケーションによって、三線組合やくるちの杜プロジェクトの課題に対して、学術的な支援を模索する。そして、分野横断的研究へと展開し、長期的な持続可能性を見据えながらの課題解決の方向性を定める。また、これらを通して、生態音楽学の実践的方法論を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

【文献資料収集】

三線の素材、製作、製作の歴史をはじめとする三線に関するさまざまな文献資料、海外の関連する楽器の事例などに関する文献資料、沖縄県の木材を中心とする生態環境に関する文献資料、生態学や生態音楽学に関する資料収集を行う。

【フィールド調査】

- 三線組合主催および関連事業の視察
- 楽器製作事業者の現状と課題把握
- くるちの杜プロジェクト実行委員会活動調査
- 樹木、木材の性質、楽器、文化資源と生態環境に関する調査

【国際共同研究】

James R. Edwards 博士 (SINUS, ベルリン; Edwards 2019)、Rupert Cox 博士 (マンチェスター大学, イギリス)との共同調査を行う。

【学会発表等】

日本サウンドスケープ協会浜松研究会 (2018年8月 浜松市、アクトシティ浜松)、国際小島嶼文化会議 (2018年6月 ノルマンジー、MRSH 大学)、日本島嶼学会 (2018年8月 東京都千代田区、法政大学)、国際伝統音楽学会 (ICTM) での口頭発表 (2019年7月 バンコク、チュラーロンコーン大学)、日本音楽表現学会第20回(ソナーレ)大会での基調講演、レクチャー&コンサートの企画およびビデオプレゼンテーション「持続可能な沖縄の三線製作とパートナーズプロジェクト」の制作発表 (2022年6月 浜松市、浜松学院大学)、東洋音楽学会第73回全国大会での映像発表 (2022年11月 三鷹市、国際基督教大学)。

4. 研究成果

平成 30 (2018) 年度

【フィールド調査 三線組合主催および関連事業】

2018 年 6 月 三線大学 (那覇市、三線組合事務所)

2018 年 7 月および 11 月 県産三線普及ブランド化委員会会議 (那覇市)

2019 年 1 月 国の指定による伝統工芸品 (三線) 記念祝賀会
(那覇市、マリエールオークパイン)

2019 年 2 月 シンポジウム「三線の伝統と未来 県産三線普及ブランド化事業報告」
(那覇市、沖縄県立博物館・美術館)

【フィールド調査 楽器製作事業者の現状と課題把握】

2018 年 5 月 三線製作者 (石垣市、糸洲三線屋)

2018 年 6 月 福山琴製作者 (福山市、藤井製作所)

2018 年 7 月 ドイツ国家バイオリン製作マイスター取得者
(東京都、シマムラストリングス秋葉原)

2018 年 5 月 ベトナムにおける三線販売仲介業者 (東京都北区、飲食店)

【フィールド調査 くるちの杜プロジェクト実行委員会活動調査】

2018 年 9 月 サントリー地域文化賞授賞式 (東京都、インターコンチネンタルホテル)

2018 年 10 月 くるちの杜 100 年プロジェクトの育樹祭および講演 (くるちの杜、読谷村)

【フィールド調査 文化資源と生態環境に関する調査】

2018 年 6 月 パリ楽器博物館 (パリ)

2018 年 6 月 生態環境 Ecomusée de la Baie 博物館と Mont Saint Michel
(モンサンミッシェル)

2018 年 10 月 塘路 (とうろ) タンチョウ観察エコツアーと阿寒湖アイヌコタン視察 (釧路市)

2018 年 10 月 阿寒湖アイヌコタン (釧路市)

【学会等での口頭発表等】

平成 30 (2018) 年度は、Evangelia Papoutsaki & Junko Konishi の共同発表により、国際小島嶼文化会議 (2018 年 6 月 18 日 NORMANDIE-CAEN、University of Caen) にて、"The Vending Machine man: Innovative Ways of Sustaining Okinawa's Shimakutuba and Culture" を行った。三線文化の持続可能性にとって、「島ことば」の継承は不可欠である。本発表では、沖縄本島での共同調査をもとに、メディア研究を専門とする Papoutsaki 氏による Communicative Ecology 理論を自動販売機の再利用とラジオ放送によって沖縄の島ことば継承に貢献するプロジェクトに援用して紹介した。

日本島嶼学会 (2018 年 8 月 31 日 東京都千代田区、法政大学) は、自然系、文科系、芸術系と多様な研究者や行政関係者、NPO 法人など島嶼地域に貢献する個人からなる学会である。「生態学的観点からみた楽器と島嶼学 沖縄の三線を例に」と題する発表を次の手順で行った。まず、エコシステムにおける楽器と音楽の役割を再考し、民族音楽学研究における人間中心主義からの脱却、応用音楽学研究から生態音楽学研究への流れを整理した。そして、読谷村とくるちの杜プロジェクトの活動を紹介し、三線をめぐる生態音楽学と島嶼学への貢献について論じた。

令和 1 (2019) 年度

【フィールド調査 三線組合主催および関連事業の視察】

2019 年 9 月 くるちの杜 100 年プロジェクト音楽祭 (2019)

2019 年 12 月 三線 100 挺展示即売会 受け継がれる三線の魅力

【フィールド調査 楽器製作事業者の現状と課題把握】

2020 年 8 月 邦楽器専門誌記事と編集者への聞き取り

【フィールド調査 くるちの島 (きょうだい) プロジェクト in 久米島調査】

2020 年 1 月 久米島町文化協会、だるま山園地 (久米島町大田) 他

【フィールド調査 文化資源と生態環境に関する調査】

2019 年 6 月 コアの木の植樹 (ハワイ島)

2019 年 8 月 外来種アカギ利用と楽器製作 (小笠原父島、小笠原グリーン株)

2019 年 10 月 琉球大学農学部造林学研究室

【学会等での口頭発表等】

本年度は、国際伝統音楽学会 ICTM (2019 年 7 月 16 日 バンコク、チュラーロンコーン大学) にて、"The project of 100 years' Reforest of Kuruchi trees in Yomitan village: Toward Sustainability of Sanshin Making in Okinawa" と題する口頭発表を行った。内容は、理論的枠組みとして、楽器を対象とした「民族生態応用音楽学」を掲げ、その背景として沖縄の三線とくるちの杜プロジェクトが存在すること、その活動は地元の三線製作者、文化活動家、音楽家によること、その延長として他の楽器をめぐる状況を見据えている。グローバルな脈絡における持続可能な音楽と楽器の方向性について議論した。

また、2019 年度文化庁大学における文化芸術推進事業の招聘講演で、「今を生きる人々と育む

地域芸能の未来」生態音楽学と地域の歌の持続可能性—琉球弧の歌と三線—」を口頭発表した。くるちの杜プロジェクト音楽祭 2019 で出会った James R. Edwards 博士 (SINUS, ベルリン) と共同研究を行い、論文執筆作業の準備を進めるために情報交換をし始めた。本研究テーマに関連して、マンチェスター大学の Rupert Cox 博士とも、沖縄の三線文化と音に関して意見交換し、Cox 博士らがドイツで出版を計画している書籍にも寄稿できるよう調整を始めた。

令和 2 年 (2020) 年度・令和 3 年 (2021) 年度 / 令和 4 (2022) 年度

【学会発表・映像制作発表】

2022 年 6 月、浜松市で開催された日本音楽表現学会第 20 回 (ソナーレ) 大会にて、レクチャー「持続可能な沖縄の三線製作とパートナーズプロジェクト」としてビデオプレゼンテーションを行った。これは、令和 4 年 4 月、仲嶺幹・三線組合事務局長が工房で作業をしながら、報告者の聞き取りに答えるかたちで、ビデオを収録・編集したものである。

主な項目は、企業の支援により、三線の魅力で地域ブランディングに貢献する、県内の産業と文化が『沖縄らしさ』を携え、共に発展する未来を目指す、若手製作者育成、こども三線教室の運営、三線の樹プロジェクト (原材料の育樹・造林) であった。の 1 つが、企業とタイアップした三線の製作販売である。斬新でカラフルなデザインによって、伝統文化にあまり関心のない層までもターゲットに取り込むことが目論まれる。では、ジャンルや流派を問わず三線音楽に関わる三線組合の立ち位置を活かして、三線の魅力を子どもたちに伝える活動を展開する。は、材の確保のために三線の樹プロジェクトは継続するが、三線組合としての活動展開を推進したいとのことであった。

映像プレゼンテーションは、基調講演「楽器をめぐる自然と文化」に続いて、報告者の司会進行によって行われた。基調講演では、浜松市楽器博物館が資料収集や調査研究を通して直面した自然環境の変化等による楽器存続の危機的状況が明るみになった。報告者の映像プレゼンテーションに続く箏曲演奏家による実演を交えたレクチャーでは、箏や三味線の製作が激減・断絶に近い状況であることが報告された。

3 年ぶりの対面開催の大会であったことから、参加者の反応を直接確認でき、積極的な意見交換が行えた。多くの参加者が、沖縄県内における三線製作や日本伝統楽器製作現場が直面する材料枯渇や製作技術伝承の危機的状況を衝撃的に受け止めた。演奏家を中心とする音楽表現に携わる研究者は、日本音楽実演家同様、楽器を取り巻く事情を積極的に知るすべがなかった。そのため、民族音楽学的手法を基礎としつつ、環境へのかかわりから社会的に従事する生態音楽学の実践の重要性について、参加者に広く周知する機会となり、長期的な持続可能性を見据えた生態音楽学の実践的方法論の確立の重要性への理解が広まったと思われた。

2022 年 11 月 13 日開催された東洋音楽学会第 73 回全国大会において、2017 年から 2022 年の 6 年間の継続的な調査結果をもとに『くるちの杜 100 年プロジェクト in 読谷をめぐる 6/100 (2017-2022) 年の記録』と題する映像を作成し、映像発表を行った。また、そのライナーノートを URL 付きで公表した (小西 2023)。昨今では、アカデミックな領域のみならず、短期・長期のワークショップや個人制作によって、文化的価値の高い映像が制作され、また発表される機会も生まれている (Chio 2021)。

記録ビデオ『くるちの杜 100 年プロジェクト in 読谷をめぐる 6/100 (2017-2022) 年の記録』は、映像人類学におけるアート作品制作に関心の目を向けながらも、応用民族音楽学的に研究成果を還元することを目的としたものである。研究者が媒介となって「くるちの杜 100 年プロジェクト in 読谷」の活動を一般に広報することのみを目指すものではなく、プロジェクト内部者の視点から 100 年のうちの 6 年間の出来事の一部を切り取ったものである。それゆえ、本ライナーノートとセットにすることで、記録ビデオを相互補完することを意図したものである。

内容は、三線組合が植林・造林事業の一環としてボランティア参加している除草 (草刈り) 作業やイベント協力、啓蒙活動を中心としている。音楽にかかわるビデオであることから、ビジュアルな展開においてもテンポ感を意識した。オープニングの創作新民謡は、くるちの杜が新しい作品を生み出す場となっていることを示す。しかし、淡々とした節回しからなるこの曲を沖縄民謡への関心がない人でもいつの間にか聞けるように、静止画と組み合わせ流れを作り、先の展開を予告した。続いての読谷村の位置を紹介する部分では、倍、倍と静止画提示のテンポを速めていくことでスリル感を演出し、米軍が上陸した過去と現在のシーンをつなげた。しかし、戦争はあくまでも背景扱いとし、説明は最小限にした。

オープニングを新民謡、クロージングを古典の長老たちによる三線演奏を選んだのは、長老からのプロジェクトへの期待を伝えるとともに、これらの循環する音楽様式によって、世代から世代への継承を象徴するものとして採用した。クロージングでは、直前のダイナミック琉球で若者が叫んでジャンプするところで倍速にして画面転換をする。続いての黒木の静止画は、この若者が長老たちのように年輪を重ねていくことを示唆した。単調な黒木の除草 (草刈り) をアーティキュレートする音楽イベントをいかに挿入するかなどには工夫をし、著作権上の問題も解決できる編集とした。

上映後、東洋音楽学会大会参加者を始め、映像人類学者であるマンチェスター大学 Rupert Cox

博士らにもコメントを求めた。技術上の改善点など、厳しい意見やさまざまな示唆を得たことから、ライナーノートとして、持続可能な継承、平等、戦争と平和という映像のテーマやサウンドスケープに関するコンセプト、音楽とビジュアルに配慮した構成、制作技術や著作権処理についてなどをまとめた。

参考文献等

Allen, Aaron

2012 “‘Fatto di Fiemme’: Stradivari’s Violins and the Musical Trees of the Paneveggio”. Edited by Laura Auricchio, Elizabeth Heckendorn Cook, and Giulia Pacini, *Invaluable Trees: Cultures of Nature, 1660-1830*, 301-315. Oxford: Voltaire Foundation.

Allen, A. S. and K. Dawe

2016 *Current Directions in Ecomusicology: Music, Culture, Nature*. New York: Routledge.

Edwards, James

2019 “A Field Report from Okinawa, Japan: Applied Ecomusicology and the 100-Year Kuruchi Forest Project”. *MUSICultures* 45 (1-2): 136-45.

Chio, Jenny

2021 “Visual anthropology”. *The Cambridge Encyclopedia of Anthropology*.

<https://www.anthroencyclopedia.com/entry/visual-anthropology>

Dirksen, Rebecca

2012 “Reconsidering Theory and Practice in Ethnomusicology: Applying, Engaging, and Advocating Beyond Academia”. *Ethnomusicology Review* 17.

<https://ethnomusicologyreview.ucla.edu/journal/volume/17/piece/602>

Harrison, Klisala

2012 “Epistemologies of Applied Ethnomusicology.” *Ethnomusicology* 56-3: 505-529.

小西潤子

2023 「ライナーノート『くるちの杜 100年プロジェクト in 読谷』をめぐる 6/100 (2017-2022)年の記録」 『ムーサ』 24: 43-53.

Pettan, Svanibor

2008 “Applied Ethnomusicology and Empowerment Strategies: Views from Across the Atlantic”. *Musicological Annual, special issue on applied ethnomusicology* 44-1: 85-99.

Pettan, Svanibor and Jeff Todd Titon, eds.

2015 *The Oxford Handbook of Applied Ethnomusicology*. New York: Oxford University Press.

Seeger, Anthony

2006 “Lost Lineages and Neglected Peers: Ethnomusicologists Outside Academia”. *Ethnomusicology* 50-2: 214-235.

Titon, Jeff Todd

1992 “Music, the Public Interest, and the Practice of Ethnomusicology”. *Ethnomusicology, special issue on music, the public interest, and the practice of ethnomusicology* 36-3: 315-322.

2013 “The Nature of Ecomusicology”. *Musica e Cultura: rivista da ABET*.

https://www.academia.edu/5517860/The_Nature_of_Ecomusicology_2013_

2015. “Sustainability, Resilience, and Adaptive Management for Ethnomusicology”. Edited by Svanibor Pettan and Jeff Todd Titon *The Oxford Handbook of Applied Ethnomusicology*, 157-198. New York: Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小西 潤子	4. 巻 24
2. 論文標題 ライナーノート「くるちの杜100年プロジェクト in 読谷」をめぐる6/100 (2017-2022)年の記録	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ムーサ	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junko Konishi and Evangelia Papoutsaki	4. 巻 14-1
2. 論文標題 From Local Media to Vending Machines: Innovative ways of sustaining Okinawa's shimakutuba and island culture	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Shima	6. 最初と最後の頁 231-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Junko Konishi	4. 巻 29
2. 論文標題 Champru as a cultural strategy of sustainability: Focusing on the Okinawan performing arts in Nanyo	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Musicology	6. 最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小西 潤子	4. 巻 46-1
2. 論文標題 応用音楽学的実践としての山口修写真コレクションのデータベース化に向けて - 民族音楽学の成立概略史と1970年代沖縄・奄美の楽器の写真を手がかりに -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 99-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Junko Konishi
2. 発表標題 The project of 100 years' Reforest of Kuruchi trees in Yomitan village : Toward Sustainability of Sanshin Making in Okinawa
3. 学会等名 The 45th World Conference of the International Council for Traditional Music (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小西 潤子
2. 発表標題 生態音楽学と地域の歌の持続可能性－琉球弧の歌と三線－
3. 学会等名 2019年度文化庁大学における文化芸術推進事業「今を生きる人々と育む地域芸能の未来」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Evangelia Papoutsuaki and Junko Konishi
2. 発表標題 The Vending Machine Man: innovative ways of sustaining Okinawa's shima kutuba and culture
3. 学会等名 ISIC 14 International Small Islands Cultures Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小西 潤子
2. 発表標題 Ethnomusicology, Applied Ethnusicology and Ecomusicology: Current Direction to Studying Soundscape
3. 学会等名 日本サウンドスケープ協会浜松研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小西 潤子
2. 発表標題 生態学的観点からみた楽器と島嶼学 沖縄の三線を例に
3. 学会等名 日本島嶼学会2018年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小西 潤子
2. 発表標題 生態音楽学から見る くるちの杜100年プロジェクト in 読谷
3. 学会等名 くるちの杜プロジェクト10周年スペシャルイベント(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲嶺 幹 小西 潤子
2. 発表標題 持続可能な沖縄の三線製作とパートナーズプロジェクト
3. 学会等名 日本音楽表現学会第20回(ソナーレ)大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小西 潤子
2. 発表標題 映像発表 映像発表「くるちの杜100年プロジェクト in 読谷」をめぐる6/100 (2017-2022)年の記録
3. 学会等名 東洋音楽学会第73回全国大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Angus Carlyle, Rupert Cox, and Kozo Hiramatsu eds.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Berlin: Archive Books	5. 総ページ数 286
3. 書名 Zawawa: Listening to the Aftermaths of Conflicts in Okinawa	

1. 著者名 Aaron S. Allen and Jeff Todd Titon eds.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 320
3. 書名 Sounds, Ecologies, Musics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

http://www.okigei.ac.jp/outline/teachers/tc-music/tc-culture/culture-konishi.html

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

英国	Manchester University			
ドイツ	SINUS社会経済研究所ベルリン出張所			